

F-4 家庭科における「家庭生活」概念の検討

高知大教育 鈴木 敏子

目的・方法 家庭科は、その認識対象を「家庭生活」におくことについてはほぼ一致しているものの、教育的価値や独自性が十分明らかにされていないことから、教科としての存立が常に問われてきた。このような状況の中で、家庭科の教科理論を構築しようとするとりくみもいくつかなされているが、その場合、中心的な認識対象となっている「家庭生活」とは何か、ということを確認にすることが基本的な課題であろう。ところで、これまでの家庭科の教科書や関係資料では、「家族」「家庭」「家庭(家族)生活」等々、類似の用語が厳密な規定や原則性なく使用されているように思われるし、教科理論確立のころみの中でもそれらの概念整理が行われていない。そこで本報告は、学習指導要領ならびに指導書、家庭科教科書、各家庭科研究組織発行の文献、いくつかの教育実践例等々を分析して「家庭生活」等の概念を整理し、家庭科の教科理論確立に寄与していくことをねらいとする。

結果 「家族」「家庭」「家庭生活」等々、類似の用語を科学的な根拠によって概念化し、使い分けている資料はみられない。現象的側面を記述、説明することによってこれらの用語を定義づけたりしているものが大勢である。また、家族(家庭)の本質的機能に「労働力の生産・再生産」「生命と生活の生産・再生産」等とおくものもあるが、そこではさらに「労働力」「生命」「生活」「再生産」などの概念が十分検討されていないことから概念化に成功していないと思われる。